

法座のすすめ方

鎌 田 行 学

(愛知県妙恩寺住職)

誠にまずいお話でございまして、成功した話ならいいんですが、いつも反省ばかりしております。そのご報告といつていいでしょうか、そんなような事で、お話させて頂きたいと思っております。

ただ今、前日蓮宗信徒青年会長の佐藤策郎さん(話の要旨は同誌に掲載)のお話を聞きまして、気持が込み上げてまわりました。長い間、本当にご苦労さまでした。

しかし、その青年会が、今もなお栄えないのは何故であろうか。それは、我々一人一人の住職の考え方にあるのではないのでしょうか。例えば、青年の船とか、檀信徒研修とか、あるいは少年の研修とか、毎年々々行なわれております。そうして、成果が上がった、成果が上がったということを、いつもお聞きしております。その会場において、非常によかったという声や、参加した檀信徒から出された感想文は立派だった、こういうことはありますが、しかし、その檀信徒なり青少年なりが、その後、どうなっておるのでしょうか。また、その青少年を送った寺院が、その受けたところの講習を基にして、どのようにご自坊でおやりになっていられるのでしょうか。

青年会の会合には出て啓蒙をする人はあるけれども、寺院の中に、青年会を持たずに、しかも、そこで青年会の発

展を祈るという中で、どこに発展することがあるか。自身が、啓蒙する以上は、自分が行なつていかなきゃいかん。よく言説布教と言いますが、ただおしゃべりしているのが布教ではないということを、私は本当に思うんです。真剣に行なつてどのような成果を得たかというところに、はじめて研究の効果というものが表われるんじゃないかと思うんです。これが、私にとって本当にわからないことなんです。例えば、「研修を身延でやったにしても、どこでどのようなことをやるにしても、それで終わっていたら線香花火と一緒にじゃないか」、そこに、佐藤さんが非常にご苦労なされた。佐藤さんが私の所に訪れになったのが、今から七、八年前、いや、十年ぐらい前だったと思います。その時に私は、簡単にこう申しました。今でも覚えております。わずかな青年会員を連れ、代表者を連れて私の所で会議をやったんです。

その時に、「私は宗務院へ行つてこう言つてお願いした、だれだれにこういった」と、「簡単ではないか、自分が行政を行うんだからというけれど、このようにして、例えば青少年会を作ろう、それには規則をこう作ろう、このように発展させようという。ところがぜひ青年会を作つてくれと尋ねた方の中で、協力したご寺院が何軒ありますか。たった七軒か九軒ではありませんか。五千カ寺といわれる中の七軒か八軒で、全国青年会なんていえるもんじゃない」。佐藤さんのおっしゃるとおりです。その中で苦勞に苦勞を重ねておられました佐藤さん、本当にご苦勞だったと思います。

私は、ちょうど今から十年ぐらい前ではなかったかと思うんですが、東京都のたしか統一信行会だと思えます。伺つた時の最後の言葉に、このことを申しました。そうして、「皆さんと共に南無妙法蓮華經という旗印をかかげて、靈山に向かつて、みんなで努力しようじゃないか」と申しました。これも、どうやらそのままでございます。

何事もそうですが、結果を見なければ、成果とか失敗はわからないんです。私達は、常に自分の行くこと、その中には、常に反省と努力を重ねているというのが、各寺院ではないでしょうか。

私は学校も行っておりません、小学校も行っておりません。お坊さんになったのは四十八歳の時です。五十何歳だったか、もう古い話で忘れてしまいましたけれども、お寺というものはなかなかできませんので、まず自分の家を教化場として出発しました。結社といいますが、それが十七年間、随分長く、ところが場所が狭くなりましたので、なんとかしてお寺を建てたいと思っていました。

私がいつも思うことは、善い事を考えていれば善い事がくる、与えるもののみ与えられる、生かすもののみ生かされるというのが、法華経じゃないかということです。それが、何かにつまずくとか、何事かがあれば、それは宗祖のお心と違っているから障りがくるんじゃないかと思っております。

十七年間、土地の狭い上にお金も全然ない。そこで地所がほしくとも買えないんです。まあ転々としましたけれども、最後には自分が住んでいる家もありますので、その地所を売らなければ、望む地所が買えないんです。そこで売りましたよということになりました。その金銭の調達が遅れたら、もうダメだったんです。その時はそれを心配しないで、頭がはげたと思うんですけれど、その間が三日しかない。それを交渉してジツと眺めながら思ったことは、もし、私に間違いがなければ、昔から助ける者のみ助けられるということと同じであるから、必ずご利益があるということでした。過去にもそういうことを経験しておりますが、そこで私はお題目を唱えて待つておりました。これから寺を建てるといって、いろいろと大きなものですから、その為の資金を借りなきゃならん。一カ月が十万でした。その当時、随分高いですよ。だけどそれを借りなきゃやっていけない。やれるかわからないけれど、そこへ移ったんです。

そして地所を買った所に家を建てなきゃならんということで、これがいくらか忘れましたけれど、でき上がって一億四、五千万円です。これを借りるに借りられないんですね。しかたがありませんから、とにかく総代に頼みまして、総代に借りてもらう。こっちは払うというような形で、確か五年ぐらいで返済できました。

これは、寄付してくれとか、あれしてくれというのじゃなくて、お上人が生命を賭けているんだ、魂を賭けているんだということで協力してくれまして、仮の本堂ができました。そして今度はお寺にしたいということで、それがちょうど日蓮聖人七百遠忌の前年でした。

本堂を建てるといっても、いつもくる人は、水子の事などが随分多い。いや本堂を後にしまして、じゃあそれを建てようということで、これには仏具一切でやっぱ一億いくらかかっています。後に一番大事な本堂が残ってしまった。あの七百遠忌、皆さん共に、身延山にて落慶式を挙げました。法要の時には、涙がこぼれました。私という人間はダメだなあと思っただけです。ちょうど家でいえば、我々が孫か曾孫かしりませんが、その一番大事な親、その親の本堂が建たないうちに、自分のお寺を建てて、どういふことだ、私はそういう意志を持っておりましたから、そこでそれをお詫びしまして、此少ですが志を身延山におあげしました。

そして今度、本堂建立に踏み切ります。今もある方が、予算のことをいいます。いや、予算はありません。予算なしに建てる人はいないでしょう、と皆さんいいます。でも、ないんだからしかたない。そこで、設計するにも、どのくらいの広さが欲しいですか。こうこうが六間、全部で十二に八をたせば二十間ですね。こういうものを建てる。しかし土地が狭いから地下を利用せよならんというところで、本堂は二階ということなんです。そしてこういうふうな作れと、その案を書きました。えらいことだ。えらい事は私もわかっているんですが、どうしても、これはやらなきゃならん。私が今いう、何んにもないけれども、もし、これがつくれるならば、宗祖日蓮聖人の意志に叶っている寺だ。もし、これが建たないようならば、私はダメなんだ。

私は信徒にいつもこう言っております。「もし、私が言っていることが間違いがあるようになったら、私の言うことを聞くなよ。その時は守りを失ったんだ。守りを失ったような者の話を聞いて救われるわけがない」と。そこで、みんなと共に行こうということですよ。設計もできましたし、来年の三月を目標に本堂だけでも落慶式を行ないたいと考えております。

三

一軒の家であるならば、家族みんなが苦勞をわかち合おう、喜びもわかち合おう、これを仏教は、諸法無我といっているのではないですか。では、現状はどうか。もちつもちつ、もたれつもたれつのやり方じゃないか。そのようなところに、なんで発展することがあるかと思うんです。

そういう点で佐藤さんは、ご夫婦で全国を歩かれ、しかも信徒の団結を叫び続け、お題目を唱えながら今日まで、ざーっと努力なされたけれども、まだ十分な協力がなく、青年会はわずか十以下です。そしてそれを発展させるのも、これは各寺院によることだし、日蓮宗青年会ということがあるならば、この日蓮宗青年会と檀信徒とは、本来からいけば、年齢もそう違わない。だからお互いの苦しみをわかり合うはずだ。若い者は、年寄りのことは待つてはおれない、これをやるうという意欲があるはずだ。その意欲と意欲とをぶっつけあわないで、なんで青年が成り立ち得ようか。青年とは何かということ、私は聞きたい。

檀信徒青年会は、檀信徒が勝手にやっている、というようなことをいつていたのでは伸びません。また、寺院方が檀信徒をその青年会に送らないという理由の中に、そんな所へ行つてえらいことを覚えてきたら、こつちが困るといふことがあります。青年会なんていうものは、自分の所屬する寺を手伝つていけばいいんだというお寺もあります。

二十一世紀に向かつて、しかもお題目総弘通という名前があつて、この総弘通の中で、私はこのことを聞きたいと思ふんです。

私が法座というものを持ちまして、今年で四十八年になります。法座には、こうこうこういうものがあつて、これがどうだという理屈は何も知りません。私のはじめた法座は、ただお話をして、その時分は、「先生、先生」と言つていましたから、「先生、お蔭さまでこうなりました」「本当に、あんだ、喜ばれたか。それじゃあね、あんだの家を借してちょうだいよ。そしてあなたが受けた喜びを、皆さんに伝える場にしようじゃないか」という事から始まりまして。現在、約二十四、五回開いています。以前は一カ月あつたんです。家によつては三回ありますし、研修会もありますし、五日から六日はとられてしまふんです。ですから、減らすよりしかたがない。ということ、家の違ふのは家族総ぐるみだもんですから、子供会もなきやいかん、青年会も、そして婦人会も作らにやいかん、今度はそれを一まとめにした研修会を持たないと、一軒の家でみなが共にやれないということです。そこを頭におきましてやりまふので、もう大変なことです。

第一回中部教化研究会が長野で開かれた時、私が発題者になつたんですが、その時、初めて他の寺院の考え方がわかりました。参加者の中には、資料を送つて下さい、教化の仕方がわからないからどういふふうによつたらいいか教えて下さい、という教師が多かつた。また、個人教化をどうやつたらいいですかということでした。

皆さん、坊さんを除いた、あらゆる行ないというものは、セールスでもなんでもそうですけれども、初めはひとりなんです。あるところに行つて教化をするなり、商売なら、やるその中で、売る力、買つてもらう心というものができるとはいいですか。買物にしても、パートに行つても同じことじゃないでしょうか。売る買うはタイミングの問題です。

私自身が寺の住職になりまして、他の寺院に行きますと、まずビックリするのが、玄関でさんざん待たされること

です。奥さんが出てきて、立つてものを言うことです。そしてそれからなかに通してくれます。そこでお茶が出て、誰もいない所で、仕方がないから、そこらのものを見てる。そのうち住職が出て来ると、私は新参な者、新発意と言われたことがあります。「おお、新発意か」、なんていいながらそこへお座りになる。ひどいになると、本堂へどうぞといつても、おあかりもつけてくれません。これで寺が成り立っているんですね。寺っていいもんだと思います。同時に、そのような態度が、宗門であれ、なんであれ、衰退していく原因なんじゃないですか。

私たちも同じなんです。よそへ行った時、来た時、みんな同じなんです。従って一番最初にみえた人の挨拶からがすでに教化なんです。スリッパをすすめるのも、お茶を出すのも、その所作すべてが教化であると受けとらねばなりません。それは、身に付けた教え、言葉じゃなくて、身に付いた教えです。法華経とはなんぞや、といえば、そんな難かしいことじゃないんです。このようなことは、決して信仰とかなんとかいうほどのものではない。当り前のことなんです。その当り前のことがすでに当り前でなくなつたところに、難かしさがあると私は思います。

話を元へ戻しまして、歩んできた四十八年は、そういうことで一方通行。そこで、自分は自分なりに、ああいう話し方はまずいとか、ここはちょっと心が足りんなどか思うようになりまして、思ったことは、私は何も知らないなかでいきなり飛び出してやったことです。私に手をとられる者は気の毒だなということでした。法華経の教え、あるいは日蓮聖人のご遺文を通して教えてもらうところがあるならば、信者達をそこへ出そうということになりました。これが石川泰道上人の布教師養成講座です。そこへ平均五、六人、多い時で七、八人、道場を新設している時にストップしてしまいました。最も多く行ったのが十二回、十三回です。もう一つはいろいろな会合に参加させる。どういう会合であろうと、その人のためになるところであるならば、寺がその費用を負担して行かせます。私にとつては可愛い子供ですから。しかしこれが行き過ぎまして、過保護にしたというんで、同僚からも、お前のやり方が悪いとお叱りを受けておりますけど、可愛いものですから、どうしてもそうなってしまうんです。もし、その人達

が当たり前になつたら失敗ですから、そうならないようにする信徒の教化の仕方が難しいと思います。

どの人も話をする時は、みんな法華経・ご遺文を話の中に無理してでも入れます。話は上手になつたけれども、布教師養成講座に信徒を送る時の私の姿勢が問題なんです。信徒達は、そこに行かれる人が大変だなど思うから、たとえば、信徒はむずかしい教学に縁がないので、聖語録などの必要なもの、生活にマッチしたもの、法華経講座の解説などを後ろにつけて、これを本にしまして信徒に作らせました。なぜ作らせたかというところ、貴方の同僚がこれから学びに行くんだから、その人のために少しでも役立つという気持ちを作ってもらいたいということで、作るようにしました。それは同時に、行く人だけではなく、私の寺の研修会に出る人にもあげるためです。そうすると、否でも応でも見るようになります。養成講座から帰つてくると、そのままではなく、講座で学んだこと、講話の仕方などをどういふふうに学んだかを発表する。発表すると、聞いている人が、養成講座に行った人はああいうことを学ぶのかと思ひ、いつの間にかお経やご遺文を入れて信仰の体験談を話せるようになります。このことは非常によかつた、嬉れしかつた。やつぱり子供を育てるには、こういうふうにやらなきゃいかんと、住職だけ喜んでいました。

ところが、さてよ、しゃべるのはあれだけ上手になつたけれども、家庭での中味がなくてはダメだ。しゃべるだけの教えになつちやいかん、これを考えまして、宗教意識調査をしました(本誌一三四頁参照)。

よく、宗教心がないとか、仏壇がないとかいわれますが、ビックリします。こういうことが私の寺の中にもあるかもしれない、あるとすれば重大なことです。このことに目覚めまして、その後は家でやりました。そうしますと、やっているような顔をしてましたけど、家では、朝・夕の勤行もしないところがあるんです。私、ビックリしました。四十八年間、一体、何をやっているのかと反省させられました。

こういうところを見てきまして、家族ぐるみの信仰どころのさわぎじゃない。それにはまず、触合いの場をもつと作らなければいけないと思ひまして、月経を始めました。それまでは、寺の方が忙しかつたので、月経はしていなかつ

たんです。月経にでるといことは、お経をあげるだけではない。その先祖を忘れる、忘恩といことは、へソのあるといことを知らないといことです。だから、そういう人のことを、「いつ見ても、暇そうなのがへソの穴」と。暇そうにみえるへソのお蔭で、今日があるじゃないですか。お母さんのそれを忘れてるんですから、その後継ぎの人を教化していく。

お経をあげに行きまして、信徒関係なしに近所の人も集めるようにし、そこで、小さな法座みたいなもの、人生相談みたいなものをやる。その場にどういう人がきて、どういう話があつたかを、寺で出している日報に書く。しかしながら、なかなか成績が上がらない。信徒ができてこない。これはおかしいと思いました。そこで、うちの信行会についてのアンケート（百名に提出）をとってみました。

四

「あなたが未信徒の人をお誘いして、法座とか当山にお導きしたことがありますか」

ある 六十七%

ない 三十三%

なかには、十年も十五年も話を聞いている人がいるが、それでも自分が法座に行くのに、「法座に行きませんか、迎えに行きましようか」といった、さそいのできない人が三十三%、五十二人もあつたといことは、驚異ですよ。

最後に、「法華信仰者は、自身の生誕の理由とその目的を達成するために、僧俗一体となつて地涌の菩薩としての役目を、身軽法重死身弘法の仏意、実践窮行し、もつて恩山の一塵、徳海の一滴に謝し奉るべく、各々の全身全霊を傾けて自ら半年毎のノルマを定め実践を誓いましょう」という誓願をたてた結果、誓願者は九十五名、誓願のない人が

六十三人もあるんです。必ず信徒をつくりますと言ったのが一〇九人、ただし幽霊会員、その人にカツを入れて、お寺に向けるということができれば、その一人を加えてよい。こういう条件で致しました。

それは失敗に失敗を重ねて、失敗ということは伸びないということですが、気がついてみると、どこかへ行ってしまうんです。本当に大変なことです。各々修行会を持つたり、お題目講などをもって、その中での触合いを持ちながら、なんとしても人を導びいて行こうという場合に、自分が足が早く、後の人が遅いようではダメなんです。

これは歩調を揃えるということだから、先程申しましたように、もちつもたれつということとして、これを随他意というんじゃないでしょうか。そういう心で共に歩んでいくという姿の中で、少しづつ前進する姿を眺めることのできるのが、僧侶の喜びですし、そののできないのは、僧侶にとつて、もつとも悲しいことではなかるうかと思うんです。そういう上から現在の宗門を見た場合に、私たち寺院の住職として、檀信徒の人と共に行くものとはおよそ違つたものがあると思うんです。例えば、一つの青年会を作るのであれば、作りなさいよというのじゃなくて、作るまでの努力、その努力も、上役の人、経験のない人たちが、そのことによつて皆の苦勞がわかちあえる。そうして青年会ができた。啓蒙するよりも、自分がその中に入れというのが、私の持論でございます。ああしなさい、こうしなさいという人はいくらでもいるんですが、共にやりましようという人がいないんです。そこに発展がないということだと思つてうんです。

要するに、どのような名前を付けようとも、宗祖日蓮聖人のお心に近づこう、宗祖聖人の手となり足となつて努力していこうということが、本当のお題目運動じゃないかと思うんです。実践のないところには、何も生まれません。また批判の中からも生まれてこない。実践されてこそ、わかることじゃないか。

『現代宗教』とかいう本がありまして、この中の宗教意識調査(百名)に、

「仏壇はあるか」の質問について、「ある」というのが四十一%、「ない・無回答」合わせて四十八%とありました。

私は、この四十八%あるということが、今後のお寺の運営やその他にとって一番大事なことだと思えます。常に最悪のことを心におかなければならない。

「宗教に関心がありますか」

あまりない十五%、

まったくない十七%、

合わせ三十二%の者が、お寺にあまり関心が無い。すると、この無関心の人が無信徒であり、その人々を教化するのには、どういう心でやろうとしているのか、これは、私を含めて非常に大きな問題だと思えます。

「あなたの信じている宗教はありますか」の質問について、「ない」六十一%、「わからない」と「恥ずかしい」人を含めて七十二%。今後の布教は、この七十二%なんです。だから、お経をあげてお金が入ったからいいではなくて、これからどうしたらいいかということです。

五

そこで、今までやってきたことと、先月やったことをここにご披露するわけでございます。これは今まで一方通行の中で出された問題で、(配布資料の)印刷が非常に悪いのは、全て自坊で作ったからで、信徒がこれを作るのに十人がかりで四日かかっております。三日間は夜明け方まで、最後の日は四時三十分とこういうことです。私がこちらに来る時にはできてなかったと思うんです。そういうふうには信徒達が努めてくれるというのには、本当に有難いことです。「お上人さん、今度資料いりますか」「そうなのよ、私、失敗談ばかりだけど、書いてもらいたいね」「それでは、五月に入ってから座談会形式にしましたから、その中の五日間ぐらいのものをまとめて、これを届けていいですか」「い

い、では、どのくらいができる。前のはどうだ」と。ページが多いので印刷が間に合いません。五名で約百ページくらいできます。「ご苦労だけ頼むよ」とお願いしたわけです。私が夜中の二時頃行きますと、「ご前さま、疲れるから寝て下さいよ。ご前さまが起きてると仕事ができやへん」と言うんです。そういう労を受けながら、この資料ができました。これは、できるできないではなくて、もちつもたれつ、お互いが助け合っていくという、この触合いのついているからできると思うんです。これが五つあります。

信者の中に加藤弘子という人がいますが、この人は頭はいいけれども信仰心が薄いんです。そこで、宗教意識アンケートをもらった時、この人が、「私みたいな者、とてもじゃないけれど、布教、教化なんかできない」と思ったんですね。ところが、他家に行きましていろいろ話をしていろいろうちに、結果的に私にもできるんだということがわかったというお話をなされた。「入信以来、未信徒の人を誘ったことがあるか」、これに対して、この人はなかつたんです。「ない」と書いて、後は書くところがなかつた。これは恥ずかしいことだなと、自分が思いました。けれども、自分は税務会計をやっている。各業界のことならば、どんな話でもできるが、教えになると、まったくできない。これはよほどの人でなければできません。それが、話をしているうちに、スラスラ述べたことが、いわゆる家庭の中のこと体験を通して実は教化になっていくことです。他の信者がこれに対しての評を書いています。これを見て、私が思ったことは、これから体験を発表した時は、お互いの中から、講師といいますが、あるいは話の中で、こういうところはよかつたけれども、こういうところが足りなかつたんじゃないかということを、お互いが考え発言ができ、あるいは自分が行なえるようにするには、やはりお互い評じ合うことが必要であるということです。その人の体験を通して、どう考えるかが必要だ。あるいはこれに対して間違っているか知れません。信行会の時の何月号の何々の講評に対して、私はこう思うということ、話し合いの場ができるのじゃないか、このように思います。

六

それから、竹の子会というのがあります。これは小学生の集りでございます。

今の方たちは大人ばかりですから、子供から見た家庭・家族はどのようにみえるかということ、親が入ってはダメなものですから、子供だけを集めまして、「あなたの所のおじいちゃんはどうかな、おばあちゃんはどうかな」という話をしまして、思ったことを書かせました。それを七カ所で行なつたのですが、特に私たちが感心したのは四年生と六年生なんです。後は子供ですから、こうしてもらつたから有難い、ああしてもらつたからうれしいとか、これが子供の本性です。子供のうちは、こうしてもらつたことが喜びですし、大人は、こうしてあげることが喜びですね。だから、こうしてもらつたことからは成長していない人は、まだ子供だということですね。与えるようになると、大人ですからね。そういう点で、次の子供が実にお面白いと思つたんです。四年生の子ですけれども、非常に無口な子です。私のお父さんは丸山鉄工所に勤めています。船のエンジンを取り付ける仕事をしています。朝七時三十分ごろ出かけて、夜八時ごろ帰つてくると、疲れたと言つてゴロンと横になります。お父さんの仕事は大変だなあと思いますが、そして忙しい時は、日曜日も仕事がある時もあります。この前のゴールデンウィークの時も、鐘乳洞を見に連れて行つてくれました。子供の国にも連れて行つてくれました。でも、おこられる時もあります。それは、呼ばれているのに返事をしない時とか、テレビを見ながら宿題をすらしかられてしまいます。でも工作を一緒にしたり、遊んだりしてくれる。とてもやさしいお父さんです。

思いやりですね。子供の目に写つたお父さん、こういうことが、私達布教にあたる者として、非常に大切な事ではないかと思ふんです。

また一人の子は、

家のおばあちゃんは、以外によくしゃべります。そのために、お父さんがよく文句を言うんです。でも、僕はそういうことを聞いていて、とても面白いことがあります。あの人はどうだ、この人はどうと、大人だけで話題になつてゐる人のことを聞くと、僕が知っている人かも知れないけど、お前の知らない人だと言つてごまかします。でも、修学旅行に行つた時、僕にそつと千円くれました。だから現代ばい人だと思ひます。

子供はよく知っているんですね。それから六年の女の子ですが、

私の母は近所の人とても仲がいい。その理由は、とてもみんなにやさしく、人から何かをもらつと、必ずお返しをします。それに、自分が作つて、おいしそうな食べ物、みんなに配つて回ります。こういう点ではいいかもしれません、自分が疲れていたり、動きたくないという心があると、近所の人にお茶を飲みにおいてとか、何か用事のある時に呼ばれます。でも、悪い心があると、すぐ、行きたくないな、疲れているのにと愚痴をいいます。だから、私は、人がせつかく呼んでくれたんだから行つといでと催促します。すると、そうだね、せつかく呼んでくれたんだから行つてくるわと、人が変わります。だから、母はやつぱりやさしいなと思ひます。しかる時はちゃんとしかり、ほめる時はしつかりとほめてくれる、とてもいい母です。だから、私も母をみならつていい子にならうと思つています。

こういつた例ですが、住職として立つ以上は、その子供達が、ご両親のもとでしつつけを受け、そのしつつけを受けているところの子供が、どのように成長しているかということがわからなくては、家族総弘通にはならないんです。又青年ならば、青年をとらえても同じことがいえます。

現在の境遇というものは前世の業の報いだ、私は思つてゐます。その裏付けは又別にして、そういうふうと思つてゐます。だから、自分の境遇が悪いということは、その人の過去の足跡が悪いということになります。ちょうど雪

の後を振り返ったようなもので、振り返ってみると、真つすぐに歩いたつもりでも、曲がっている時がある。その曲がっていることを見ずに、どうして前がわかるか。後先を考えてということが人間ですし、後先を考えないのが畜生だということ、畜生界というのがあるではないか。時折り私達は、その畜生道になったり、餓鬼道になったり、非常に忙がしいものであります。以上、子供の方でございます。

七

それから五月のグループ法座でございます。

このグループ法座の中で五つとらえました。時間の関係で、一つ、二つどのような形で行なつたか話しますが、自身それに満足はしておりません。やれている、やれていると思つたのが、まったく相反しているからです。これは、私が布教に出始めの頃、いわゆる人生相談的なことから始まりながら、法華経とは何か、信仰とは何か、というような問題に、いつとはなしに入つて行くというのが、いいんじゃないかと思つた。現に私達自身、生まれようとして生まれてきたのではなし、母親も嫌で産んだそうですが、だから、これつきりできないようにということでは無い名前をいただきまして「末男」と呼ばれました。気がついたのは、私が四、五歳の頃、「末男」と呼ばれているんで、嫌な名前だなと思つた。青年になつてから、末というのが苦になつて仕方がない。辞書を引いたら、「末端」と書いてあった。私は、何をやっても末端の男にしようと思つた。しかし信仰を持つたお蔭で、考え方が変わりました。親が産もうと思つて生まれたのではない。いうならば、産まされちゃつたんですね。こちらが被害者と思つただけで、それが、なぜいやだというのに生まれたのかな。そうすると、誰かが生まれさせたんじゃないか。目に見えない何かということになると、昔の人は恵みといたしました。仏さまのお恵み、この恵みを現代的にいうと、私はおそらく真

理によつて宿り、真理によつて成長することだと思ふ。理屈から考えると、だんだん腹が大きくなり、小さい時なら、パツと出そうなものなのに、この時は流産と言われちゃうんです。赤坊はわずかな羊水によつて生まれてくる。考えられないですね。すると、これも仏さまの恵み、いわゆる真理によつて、如来のお恵みによつてということになりますね。このように考えると、これは、私達、重大な責任があると思ふんです。法華經を読んでくると法師品がでてきますね。何んで生まれたかがでてきます。欲令衆の中には、お釈迦さまが出現の理由を述べています。お釈迦さまと私達、「吾が子」っていう。だからお釈迦さまの出現の理由は、同時に私達の出現の理由でなきゃならん。そこで初めて親子になるんじゃないか。子が親になるんです。だから私達は仏子なんです。その仏の子が仏の子としての使命を果たさずに、どうして幸せがあるか、悟りがあるか。普通はそれくらいな事しか考えないですよ、正直言つて。だから教化なんて、こんなものなんです。いいか悪いか、四十八年のこれが無駄になるか、実を結ぶか。第一回の座談会形式でやるといつてもできないですよ。四十八年のシミがついちゃつてるから。こういうふうになつて下さいよと言つても、なかなか言つてくれない。「あんた、ここ」と言つても、フトンを取つちやう。「あんた、素直になりましょう」と言つてやるんですよ。

そしていわゆる問題提起、話題ですよ。あなた、お宅いかがですか、一言も言わない。これでは話し合いになりません。「貴方たちは、聞くことばかり考えてきた。聞くことだけでは答える。あんた、目もある、口もある、耳もある。耳だけでなく、口も使いなさいよ」というと、ポツポツと話す。これが毎日あるんですからうんざりします、正直言つて。その中から本に出すんです。一つ例をあげてみます。発題者の話が終つて、次のようになります。

司会

お話をお聞きして、要点をまとめますと、友人のご主人が、今後鉄工所を経営していくうえで、機械の導入設備とか企業上の問題について、節々と両親に話をするのですが、両親は長い間の経験で判断し、ご主人の意

見には耳をかそうとしないのが一つ、そのために不平不満が募る。もう一つは、両親は、一人娘を可愛がるあまり、大事な躰を誤っている。その一例は、お前が家事をするのは、お兄さんがお嫁さんをもらうまででいいのだから、それまで辛抱おし。このような躰の仕方では、可愛い妹の将来を不幸にしてしまうのではないかと、気がかりでならない。現在、妹は、勤めに出ているけれども、家事は一切やりません。身勝手なことばかりやっています。家事がせわしくて、皆が猫の手も借りたほど忙しくても、さっさとおデートに出掛けてしまう。両親に嫁入り前の娘だから、少し世話をやいたらどうかといわれるが、全然とりあげようとしなない。だいたいこの二つで、家庭内が、妹を巡って両親とご主人の対立、それに加えて嫁と姑の問題がからんで、家庭不和を作っている。以上の内容は、どのように友人を教化したらよいかという問題だと思いますが、これについて、司会は次のようにすすめている。

司会 Aさん、お聞きのとおりですが、ご意見いただけますか。

A 私の思うには、事業関係のことは、私にはわかりません。お聞きしている限りでは、両親の事業経験を通しての将来の見通しと、経験の浅いご主人の理論上の経営論との対立ではないでしょうか。両親が耳をかさない理由の一つには、今までいろいろな辛い経験を積み重ねて今日になった。ご両親の経験を通して判断した場合、ご主人が主張されるところのご意見は、例えばたんなる理想論で、結果的にはマイナスになるとか、あるいは口先だけで、実質の伴わない空理空論として、耳を貸さないのではないのでしょうか。そこで、両親が息子さんに理解のできるように、鉄工業の業界の移り変わりに対応し、苦勞して今日を築いた、にがい経験を話して、一途に、これが繁栄の道だと信じて、我が家をもって主張する熱意と愛情に感謝をし、説得したらどうでしょうか。ご主人も、どんなに立派なご意見を持っていても長い間の業界の浮沈みの中で、生き抜いてきたご両親の歴史をよく観察し、その素晴らしい足跡で、ご両親のもとに実践していけば、ご両親の生き方もわかるし、将来の見通しも

できるのでは。その上で、ご意見を述べられたら。

司会 よいご意見をお聞きして、私も事業上だけでなく、日常生活の中で起こる様々な事に、Aさんのもの受け取り方をしていたら、家の中のゴタゴタもなくなると思い、非常に有益なご意見として有難く拝聴しました。妹さんに与えたことは、誰に聞いても道理に叶っていると思えません。娘さん自身成長していくに従って、子を愛するという言葉の意味を心の成長と共に判断し、子を思う煩惱、ただ可愛い可愛いという無知の愛を心に受け止めていったらよいか、Bさん、お願いします。

B 娘さんは、自分を可愛いがってくれる母の情を、言葉通りに受けとっているようですね。心が成長していないから身勝手な行いもでき、また、まわりの人に迷惑をかけているようですが、一向に苦にならないようですね。お気の毒な人ですね。お嫁さんとお姑さんとの間に、夕飯の仕度のことと言い争いになったその原因は、どこにあったのでしょうか。お気付きの点について一言。

C お嫁さんは、食事の仕度が不規則で、食事の仕度にも気をつかうということは、私と同様ですので、気持ちばかりです。すぐ食べられるようにと、焼そばやラーメンの材料だけを整え、すぐ作れる準備をしていた。だが、家族の人が帰って来て、お姑さんが台所に来て、「まあ、まだ仕度がしてないの。何をやっているの」と腹立たしさを感じて、冷蔵庫より魚を出し、焼そばを焼き始めた。ここに、争いの種があるように思います。お嫁さんはムカツとして焼そばを作って各々に配り、お姑さんの前に黙って置いた。お姑さんは、「あんた、黙って置いたんではわからないでしょう」と一言。お嫁さんは、前に置いてあれば、わかりそうなもんだと思っただが、「お母さんのです」と言うと、お母さんは、「あんたは、だいたい口が足りないんだよ。ちよつとかける言葉が思いやりなんだよ。あんたにはそれが無い。それに、まだ生ゴミも捨ててないじゃないか」。何だか、目の前に見える光景ですね。お嫁さんも、お姑さんも、口が足りませんね。それは、相手の心を労る心持ちがないからだと思う。お

姑さんがお嫁さんに、「ああ、腹が空いた。えみ子さん、仕度ができるかしら」と聞かれたら、どうだったでしょう。お嫁さんはきつと、「ごめんなさいね。遅くなって。焼そばでもやろうかと思って、材料は整えておいたのですが」。こんな会話になったのではないでしょうか。お嫁さんも、工場から帰って来て、お腹を空かした家族の顔を見たら、「まあ、ごめんなさい。仕度が遅れてしまって。今すぐに作ります」と言ったら、お姑さんの大きな顔を見ず、冷蔵庫から魚を取り出して、腹立たしさでそばを焼くこともなかったでしょうし、お姑さんから、「まだ仕度がしてない。何をやっているの。あんたは思いやりの心がない。それに、生ゴミが捨ててない」などというお叱りを受けることはなかったでしょう。

司会 なるほど、Cさんのおっしゃるとおりですね。要するに、仕度してなかったということは、目に見えるけれども、なぜ、どうしてという、目に見えない理由について、尋ねるものが足りなかったということでしょうか。D とつさの場合、Cさんのように思えるでしょうか。よほど気づきがあつて、心の広い人でないとできないし、また気付かないと思います。皆さん、どうです。Cさんのおっしゃるように、お嫁さんも、お姑さんも、そうした時に理由を聞いたり、叱かるのではなくて、仕事ができているかしら。相手の心を痛めつけずに、やさしい労る行いが、お互いに行けるかしら。私だったら、やっぱり腹を立ててしまうのではないかと思います。よく、数珠を持つてお寺参りする人のことを、信仰の深い人といいますが、お寺参りする心と、お寺参りしているお蔭でという、形と内容の誤りを、あらためて反省させられました。

E 私もお寺に何しに行っているんだと、よく言われます。Dさんの言われるように、形だけで教を身につけていなかったということを言われるんです。主人に、「何しに行っているんだ」と言われると、腹が立って、自分は何さ、自分だつて欠点はあるさと思つたりします。幸せなことに、お婆さんも、子供たちも、みんな協力してくれますので、ご法座に行つて来るとか、お寺へ行つて来るとか言つて頼みます。今まで、何も思わずに出てい

ましたが、CさんやDさんのお話をお聞きしまして、本当にそうですね。よいお話が聞けるからという気持ちでお参りしていた自分を、恥ずかしく思っております。実際は、お寺参りする心と、お寺参りをしているお蔭という、信仰の成果みたいなものが、私の生活態度の中からは生まれようはずがなかったことを、今日は教えていただきます。

司会 今日、日常生活の中で起きるいろいろなトラブルをもとに、活発な意見がとり交わされていますが、たとえそれが、問題点と離れたにしても、非常によいご意見をお聞きできますので、このまま続けていきたいと思っています。この辺で、嫁と姑、あるいは嫁と夫とが、このトラブルをどのように治めていこうとしているのか、お話を続けて下さい。

発題者 お嫁さんは、家族の前で小言を言われ、胸おくれがしてしまって、食事もせず、生ゴミを持って外へ出た。涙が止めどもなく流れた。お嫁さんを探してきたご主人が、「こんな所にいたのか。私も、さっき一言言いたかったのだが、大事になると思ってやめた。朝から、じいさんと婆さん、あんな調子で争っているんだ。さあ、部屋へ行こう。今日のところは詫びた方がいい」となぐさめます。お嫁さんは、悪いとは思わなければ、口先だけで詫びたら、お姑さんが、「わかればいい。あんたも、私の信仰している天理教の教えの本を読むといい」と言われました。お嫁さんは、「お母さんこそ、何を信仰しているのか」と思ったことがあります。ここには、お嫁さんも、お姑さんも、相手が、相手が、相手を悪く思うだけで、自分の反省の色は薄いと思いますし、夫も、家を出たということで、家を治めているという心が足りないと思います。お互いが、こういう心では、治まっていけないと思います。私も、縁があるから、友人の話を聞いたのだと思いい、私自身も、相手が、相手がいいうよりも、まず、自分はどうかを反省する心の大切さを感じました。

司会 今のお話をお聞きして、Fさん、いかがでしょう。どうしたら、この家族が和合できる方向に向かうと思

いますか。

F　そうですね。磁石でもN同志S同志で反発しては、和合の余地はありません。よく、ご前さまが、「まず、自分が変わらなければ、相手を変えようと思ってもムリです」とお話し下さいますが、でき上がった家へ建具として入ってくるのが嫁ですし、まず、お嫁さんが心を変えていかれるのが、一番近道ではないかと思えます。お嫁さん一人に、我慢しろということではなく、「主婦は燈台である。その明滅は家庭の喜怒哀楽を左右する」ということも、ご前さまからお聞きしますが、そういう心で、お嫁さんが、家族の性格をよくつかむように努力し、その上でかじを取る賢い嫁になられたらと思います。

司会　貴重なご意見をありがとうございます。小さなトラブルは、どこの家にもあることだと思えます。家族は家と同じ。柱・壁等がすきまなく組み合わさり、柱は柱としての役割を果たすから、家として立っているように、家族も心を一つにしないと円満にいかないかと教えていただくように、この家のトラブルを人ごととして受けとめるのではなく、この法華信仰を基として、自分にあてはめ、反省し、それを実行に移す努力を積み重ねていくことが、家庭円満につながっていくと思えます。今日は、いろいろな立場から、皆さんが述べて下さった有益なご意見をよく心にとめて、日常生活の中に活かして行って下さい。どうもありがとうございました。

というのが、座談会の中で生きる言葉です。私はまず、家庭の中をどのように治めていくか、またどのように法華信仰というものに向けていかなければいけないかということをお思ひまして、過去四十八年の間行なって、その中で、話を上手になつた。今は相手に説くということだけではなくて、行なうということが、欠けていると思ひますし、同時に、家庭も、お寺も同じでございます。

八

そこで、僧侶は僧侶、住職は住職としての姿勢が非常に大切ではないかと思えます。特に在家の方を中心としますので、我々からみたものと、信徒、未信徒、檀家からみた場合、非常な差があると思えます。いつも私と一緒にいると思っていたものですから、実際は、なんだこんな所におったのか、四十八年何をやってきたのかということになります。

新興宗教がなぜあれだけマンモスに発展していくか、なぜ宗門が発展しないのかという問題を、一言で言いますと、新興宗教の人達は、やろうということがあります。やる意志、自分はこれだけのものをやらなきゃいけないというものを持っております。ところが、宗門の場合、伸びてこないんです。だからこの人に、どうしてカツを入れるか、月経なら月経に生ましても、四年間ダメなんです。なぜダメかというところ、お坊さんが苦労していない。苦労していないから、適切なお話ができない。いわゆる相手を納得させるといいますか、押しつけるという事と違いますからね。大抵の場合、押しつけている。お経にはこう出てるんだという、それではダメだと思えます。何事も、本人がこうしなければならぬ、こうせよにはおれない。有難いところから、有難いところに出るんじゃないでしょうか。これが、新興宗教の中で、いわゆる引きつける魅力といえますか、そういうものが、老齢化した宗門との違いではないかと思えます。

私、別に真似ようとは思わないですけども、そのまま、すらすらと入っているうちにこうなった、というふうになるには、どうしたらいいかというので、過去には、大本教・黒住教・天理教を歩きました。出る本を見ますと、大体こんなやり方だとわかるんですね。例えば、胸が悪かった。これはどういうことか、それはこういうことか、本人が

納得できるようなものを出しています。宗門の場合ですと、それは日蓮聖人の教えでなければダメだ、こういうようなことになりますと、困難じゃないでしょうか。

何か、もう二十一世紀近くなっても、宗門の中には、信徒を教化していく、ふれあいを持っていくというものが無いじゃないですか。ここなんです、問題は。だから、坊さんは頼りにならない。そこで、こういう事は新興宗教の方がいいというので、私の方のあるご寺院で、信徒の七十%は佼成会なんです。おかしいじゃないかと言うと、うちのお上人の言うことはわからない。いわゆるご遺文にはこう出ているとかいうけど、自分は何もやってないじゃないか、それをやって見せてもらいたいというんです。そこへ行くと、佼成会に行きますと、座談会の事を「結び」というんだそうですね。その中では、その人の意見をよく聞いて、それに対して教えというものがあって、法華経の適当なところを抜粋しておいて導く。創価学会の場合は、試験、試験だそうです。頭の中が補助のようなもので、大きくなれば、それがよいということですね。上に上がれる。

もう一つは、セールスと同じで、その人に班長を与えます。これだけの人を増せば、組長になれる。ところが、その人が伸びなかつたら、落とされるんです。銀行の支店長さんでも、皆同じですね。みんな月給をもらっている以上は、これだけの枠があつてこれだけやる。できなかつたら左遷なんです。そこへ行くと、お寺はいいですね。左遷がありません。月給くれないなんて、どこの護持会もありませんよ、だから、あぐらをかいちゃうんです。お寺も、住職に対するお給料を成績によつてあげたらいいなと思つています。その代わり、信徒には、これだけ作れ、できないやつは、お前ダメだぞ。お互いが、今檀家でも、宗門にそういう規定があるんですかね。檀家はお寺の経済一切を賄え、いやですよ。出す方になれば。大体、お寺は、お墓のお守りと、法要の時には、お経をあげてくれるだけです。それで、息子が学校に行くんだから出せ、お寺を作るんだから出せ。そんなの絶対に出さん方がいい。いわゆる、全てのものはこうしてくれるからもつたない。こうせにやならんというんじゃないでしょうか。これがない。

現在、お寺と檀家とのつながりが、どちらがどうかわかりませんが、もたれつもたれつか、もちつもちつの中にあるというように思います。言い過ぎかもしれませんが。日蓮宗において、ものが決められたら、決めた事が、どこで、どのように行なわれ、そしてそれがどういう結果が出たかというものをみなければ、これから何百年経っても同じだということ。ただ上から流すだけです。

でも、自坊ではどうか。そんな事すれば、それを、どのようにやったらいいか、日々それを考え、反省し、そうして信徒のお尻をたたいてみたり、「ああ、よくやってくれたな」と言ってみたり、そういう中で、お寺というものが、経営されているのではないのでしょうか。空論かもしれませんが、そういうことを思うんです。ですから、理屈よりも行なえ、行なってみると、間違いがわかります。行えないものはダメなんです。

それから、信仰としていくもの、落ちるもの、はげるもの、これは本物じゃない。本物というものは、はげないものなんです。お化粧は、どんなに立派にしてもはげます。全てそうだと思います。命をかけられないものに本物は無い。その点、生活を投げうって、佐藤さんが本当に努力なさっている姿、これこそ本当に本物じゃないかなと、私、思っております。

人間というのは、ただ一人で歩いているわけにはいきませぬね。私は、ある人にこう言いました。「貴方の所に従業員、何人いますか。月給いくら払っていますか」「二十万づつで、六十万」「三人ですか」「はい、そうです」「いやあ、そういう考え方はいかんな。貴方は、三人が働いてくれれば、三人に給料を払っている。ところが、その一人ひとりには、家族がある。一軒の店主となったら、その家族を、自分が養っていると思わなきゃいかん。それを養う以上は、貴方も私も努力し合いながら、やっていきましょう。共に歩んで行く時に、あなたの家族も安泰、そして私のお店も繁昌、こうしていかないと、栄えることはない」。

こんなわかりきった、当り前の事が当り前になった今の時代に、私達は、どのように教えを受けとり、どのように

これを弘めて行ったらいいかという事を、自身も悩みながら努力して、どのような結果が生まれてくるか、その結果と動機、自分の努力というものが真ん中に入る、こういう気持ちで努力していききたいと思っております。

(注) 本稿は、第八回教化学研究集会における発表をまとめたものです。